

植民地期朝鮮における朝鮮佛教觀－高橋亨を中心に

Making the image of Korean Buddhism :
Focusing on the discourses of TAKAHASHI Toru

川瀬 貴也
(日本, 京都府立大学)

《 Abstract 》

TAKAHASHI Toru (1878-1967) was one of the most significant Koreanologists in Japanese academic field. He was a professor of Kyeongseong Imperial University in the prewar period and Tenri University (department of Korean studies) in the postwar period. He was majored in Korean intellectual history and literature. His achievements, especially on Korean Confucianism and Buddhism, are still referred and influential.

He wrote two pamphlets published by department of education of the Government-General of Korea in 1920. This year was a year after of 3.1 Independent Demonstration. This riot might have demanded Japanese governors to survey about Korean mentality and characteristics.

One of outcomes was Chousenjin (Korean People). The pamphlet tried to explain the Korean character in the perspective of a essentialism in Korean race. The other was a simple outline about history of Korean religions entitled Chousen shukyoushi ni arawaretaru sinkou no tokushoku (The characteristics of faith in the history of Korean religions) . He explained that Korean religions, especially its Buddhism, were easily influenced by political condition. These pamphlets seemed to be typically colonialistic, since such negative characteristics of Korean made Japanese colonial rule legitimated as the Mission of civilization and enlightenment. His discourses synchronized with the desire of Japanese Imperialism.

This article attempted to analyze his discourses in the perspective of postcolonial critics and sociology of knowledge.

※Key words: TAKAHASHI Toru, Knowledge of colonialism, Image of Korean People, Korean Buddhism, essentialism
高橋亨、植民地の知、朝鮮人像、朝鮮佛教、本質主義

I. はじめに

植民地期朝鮮において、朝鮮總督府による文化人類学的な調査が廣範圍で行われたことは周知の事実であるが¹⁾、それでは當時の日本人学者はどのような「朝鮮人觀」「朝鮮宗教觀」「朝鮮佛教觀」などを持っていたのだろうか。

そこで本稿では、その一端を明らかにするべく、當時京城帝國大学教授であった高橋亨^{とぶら}（1878～1967）の朝鮮人觀・朝鮮佛教觀を主に見ていこうと思う。彼は《李朝佛教》²⁾という大著を執筆したり、朝鮮人についてその特質を本質主義的に述べた《朝鮮人》³⁾という小冊子などを執筆しており、當時の「学識者」の知のあり方を検証するには適切な対象と思われる。本稿の目的は、高橋を代表とする當時の知識人たちの知のあり方それ自體の形式を明らかにすること、つまり別言すれば、植民地であった朝鮮に対する「学知」を一種の知識社会学的視座から再検討することである。

II. 高橋亨の略歴

ここでまず簡単に高橋の経歴を見てみよう⁴⁾。高橋は1878（明治11）年12月、新

1) 代表例としては、《朝鮮の鬼神》（1929）；《朝鮮の風水》（1931）；《朝鮮の類似宗教》（1935）などの、村上智順の調査報告書（1891-1968）が学げられよう。これらの資料は當然統治に資する資料として集められ、その正確さなどにも後に批判が出ているが、植民地における学知の性質を示してくれていると見ることも可能であろう。村上智順の評価などについては野村伸一「村上智順論」《自然と文化》66號、日本ナショナルトラスト、2001、参照。京城帝國大学関係者としては、秋葉隆や赤松智城の名も学げられよう。二人の共著としては《朝鮮巫俗の研究》大阪屋號書店出版、1937～38、が存在する。なお、植民地朝鮮の法令などを整える目的で實施された舊慣制度調査事業（朝鮮總督府中樞院が主體）も大きなトピックだが、本稿では觸れる餘裕がない。この調査の概要として朝鮮總督府中樞院《舊慣制度調査事業概要》1938、参照。

2) 初版は寶文館、1929。復刻版は國書刊行會より1973。引用は復刻版による。

3) 朝鮮總督府學務局、1920・1921。この小冊子は《日本社會學院年報》4-3,4-4,4-5（1917.3、4、5）の所收論文に「第四後論」を付加して發行したものである。

4) 高橋亨の詳しい経歴、著作一覽については、朝鮮學會《朝鮮学報》十四輯、1959年、と《朝鮮学報》第四十八輯、1968にある。ちなみに《朝鮮学報》創刊時（1951）の朝鮮學會の參與には、同じく天理大学教授となっていた秋葉隆（元京城帝國大學教授、社會學・文化人類學）がいた。彼らの他にも「引き上げ者」の京城帝國大学関係者が多く參集していた。後に天理大学学長及び朝鮮學會

潟縣中魚沼郡に生まれた。父は漢学の素養のある教育者であった。そして第四高等学校を経て、1898（明治31）年東京帝國大学文科大学に入学した。4年後の1902（明治35）年文科大学漢文科を卒業した（卒業論文は「漢易を難して根本博士の易説に及ぶ」というもの。後に高橋は「純粹易断」と稱して易断業を開業した。この卒論はその基礎となったという）。

大学卒業の翌年、大韓帝国政府の招聘で、官立中学校備教師として渡韓（歴史学者幣原坦⁵⁾の後任）した。以来朝鮮半島に長く居住することとなった。1909（明治42）年には《韓語文典》という著作を博文堂から出版した。年譜によると渡韓後漢文を介して韓国語を習得したという。韓国併合後の1910（明治43）年9月には、朝鮮総督府宗教調査囑託を命じられ、朝鮮各地の古書、金石文の収集に励むようになり、これが彼の後の研究の基礎となった。朝鮮総督府囑託となってから、高橋は儒生の動向を調べるため、朝鮮半島南部に調査旅行に出かけている（これが彼の朝鮮儒教研究の端緒だという）。その後は朝鮮図書調査囑託（奎章閣の調査）、京城高等普通学校教諭、大邱高等普通学校校長などを歴任し、彼が42歳、即ち1919（大正8）年末、文学博士の学位を取得。論文題目は「朝鮮の教化と教政」（内容は朝鮮の信仰と思想に関するもの）。1923（大正12）年には京城帝国大学創立委員会幹事に就任した。その時の同僚には半井清⁶⁾朝鮮総督府学務局学務課課長、小田省吾⁷⁾学務局編輯課長（当時）がいた。

1926（大正15）年、京城帝国大学教授に任命される。法文学部朝鮮語学文学第一講座を擔當、1939（昭和14）年までその地位にあった。1929（昭和4）年には前述の《李朝仏教》を上梓した。1940（昭和15）年京城私立恵化専門学校長に就任。1941（昭和16）年に一旦歸國し山口縣萩市に隠居。1944（昭和19）年に京城經學院提学兼明倫鍊成所所長と朝鮮儒道連合會副會長の任を受諾し、再び渡韓するが、終戦となり翌年歸國。再び山口縣萩市に引き上げた。

1950（昭和25）年、その前年に天理外國語学校が天理大学となり、改めて設立された朝鮮学科に教授として就任、朝鮮學會を起しその副會長となった。その後1964（昭和39）年まで天理大学教授兼おやさと研究所第二部主任の職に就く。1967（昭和42）年9月死去。享年89歳。以上が年譜を元にした高橋亨の生涯の概略である。

會長となった岸勇一は咸鏡南道知事などを歴任した人物。

5) 幣原坦は、後の外相・首相の幣原喜重郎の兄で、初代臺北帝國大學總長。

東京高等師範学校教授、韓国政府學部學政參與官、文部省視學官兼東京帝國大學教授など歴任。著書に《朝鮮史話》、富山房、1924、などがある。

6) 半井清は、内務官僚で、朝鮮總督府においては宗教行政にも当たった人物である。

1919の三・一獨立運動時には學務局宗教課課長として勤務しており、朝鮮總督府《朝鮮の統治と基督教》1921年（龍溪書舎より1995年復刻）を著している。

7) 小田省吾は朝鮮史研究者。朝鮮總督府學務局編輯課長兼中樞院編纂課長などを歴任。

Ⅲ. 高橋亨の朝鮮人観： 《朝鮮人》《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》を中心に

さて、ここではまず、高橋が執筆し、朝鮮總督府学務局から発行された《朝鮮人》（朝鮮總督府学務局、1920・1921年）を検討してみたい。前述のようにこの小冊子は朝鮮人の性質を本質主義的に語ったもので、このような小冊子が出版されたのは、おそらくその前年の「三一獨立運動事件」が、日本官憲をして朝鮮人の特色を探る必要性を感じさせたためと推測できる⁸⁾。また彼は同年に《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》（朝鮮總督府学務局、1920・1921年）というのも出している⁹⁾。この章では、これらの小冊子を中心に、高橋亨の朝鮮人、朝鮮宗教へのまなざしを考察していきたいと思う。

高橋はこの小冊子で様々な角度から朝鮮人を研究することの必要性を説いているが、特に彼の専門に近い文学・哲学・宗教面からの分析に重きを置くべきだと主張している¹⁰⁾。しかし歴史については、

朝鮮歴史は獨立的國家の歴史としての價値無し。約二千年を通じて内訌に非ずんば隸屬の歴史に他ならず。從て朝鮮人全部が仰ぎて以て理想的人物となす民族的偉人の出現せるを見ず。若し強いて朝鮮人の誇りとなし渴仰する歴史上の人物を索むれば彼の平壤に來りて朝鮮を開けりと信ぜらるゝ殷の箕子其人ならんか。箕子の朝鮮人に非るは最も善く朝鮮歴史の國民的價値乏しきを表象せり。されば朝鮮人自身も自國の歴史は頗る之を輕視して不必要學となせり。（中略）之に反して資治通鑑綱目は則如何なる山間僻村と雖苟も書堂の設ある處には讀まれざるはなし。（中略）彼等は自國の歴史を學修せず。故に自國歴史について得る所の知識は好事家が筆に任せて斷片的に録せる奇事怪聞に滿てる野乗か然らざれば口々傳へ來れる誇大にして年代を無視せる史的物語に過ぎず¹¹⁾

8) 同種のパンフレットとして、朝鮮總督府宗教課の渡辺彰の《天道教と侍天教》（1919.11、大阪屋號書店）や、朝鮮總督府学務局《騷擾と學校》（1921年1月、表紙には「〇秘」とある）などが存在する。これらは日本側官憲が、朝鮮人を円滑に支配するため「メンタリティ」を調査する必要性を強く認識したためであろう。前述の朝鮮總督府《朝鮮の統治と基督教》1921年も、同種のパンフレットの一つと言えよう。

9) 《朝鮮人》《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》は、共に1920が初版のようだが、共に翌年に増刷されている。ページ数も同じであり、内容も同一と思われる。《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》では、朝鮮佛教が歴史上常に政治に依存し左右されていたことを強調している。このことは後述する。

10) 《朝鮮人》、1-2頁。以下引用は舊漢字を新字に替える。

と「朝鮮史」の存在自體を否定するような記述をしている。また自國の歴史を顧みず、中國の歴史ばかり学ぶという事大主義も強調されていることに注意したい。このような記述は、後に「滿鮮史」と呼ばれる東洋史の一部門が伸張していったこと¹²⁾と軌を一にするだろう。つまり「朝鮮」という國特有の歴史が無化され捨象されていく過程が、高橋の上記のような記述からも浮き彫りになっていると言えるだろう。また美術や文学に対しても

兎に角新羅朝に在りては彼が如き傑作を残す丈の美術的手腕ありし民族が一旦佛教の衰亡するに及びては其の技巧全然地を掃ひて空しく俗悪なる佛教繪畫のみとなれり。少なくとも三百年以來の朝鮮人は審美的情操の價値を認めざりしものなり。視覺を刺激する強き色彩以外に高尚優雅溫籍なる色彩あることを知らず。一定の様式を備へたる實用的建築器具以外風韻を知らざる民族となれり。文学に至りては其の形式竝に思想共に支那文学の型を脱すること能はず。其の固有の文字として吏讀、諺文の二種ありと雖古來曾て之を用ひられたる價値ある文学あらず。形想共に支那の模倣なるが故に文学の天才の出づるなきに非るも其昨遂に支那を凌駕する能はず。文学は民族性情の粹美を表するものなるが故に其の徹頭徹尾模倣に終れるは畢竟朝鮮民族の全然精神的に支那に吞まれたる結果なりと謂ふべし¹³⁾。

と、朝鮮美術全般（特に朝鮮朝以降の美術）に低い評價しか與えていない。そして文学に関しては全てにわたって中國の影響下から脱したことはないと判断し、それをそのまま朝鮮民族の文化性についての否定へと直結させている。つまりここでも、高橋は歴史に対して同様、朝鮮の獨自性を認めない姿勢を示している。同様に哲学に対しても、朝鮮において形而上的な思惟は朱子学しかなかったと述べ、

獨り朝鮮は一度朱子学を奉ぜし以來他の学派には一顧を與へず反りて之を異端視して排斥せり。哲学は純理の学なり自由討究の学なり。其の性質上一原理打立てられば更に一段向上せる原理の建設を企畫する者現はるべきものなり。獨り朝鮮に於ては曾て此事なし。約七百年間朱子学の理氣二原理の学説に満足し之に盲從して他に合理的哲学なしと信ぜり。朝鮮の哲学には進歩なく發達なし初より化石せり¹⁴⁾。

11) 同上, 7頁。

12) 代表的な「滿鮮史」研究者としては東京帝國大學教授池内宏 (1878-1952) , 建國大學教授稻葉岩吉 (1876-1940) が挙げられる。この名稱自體が、「朝鮮」を單なる地域名と見なし、滿州と一體とすることにより、日本の大陸進出地域に一體感を與えるものであったことは言うまでもなからう。「滿鮮史」自體の批判は、旗田巍「滿鮮史の虚像」、《日本人の朝鮮觀》勁草書房、1969、参照。

13) 《朝鮮人》9頁。

14) 同上, 10頁。

との價值判斷を示している。

では、宗教に關してはどうだったのか。彼は「朝鮮佛教」と呼び得るようなものが誕生さえしなかったと述べる。

新羅高麗時代の佛教は支那に於て成立せる一切の宗旨を將來して各派其長所を顯揚せり。され共高麗を終ふる迄朝鮮的佛教宗旨の發生を見ずして已めり。外國宗教は必ず其國の國情の何れかの部分に契合せざる點あるが故に其の行はるゝの久しきに至りては必ず其の國家社會に適合して之に化融せる新宗旨の起るありて始めてよく國教として不朽の生命を得るなり。朝鮮には終に朝鮮佛教起らざりき。(中略)朝鮮佛教は其哲学文学と等しく獨創的性質を缺如せるものなり¹⁵⁾。

とか、

恒に支那にて開教せられ支那にて發達せる宗派を其の儘輸入するに止まりて一朝鮮佛教の建立されしを見ず。朝鮮佛教史は即小規模なる支那佛教史に外ならず¹⁶⁾。

と述べる。ここで述べられているのは、朝鮮においては佛教はその國に合わせた獨特の發達をしなかったこと、朝鮮佛教は中國佛教の一種、支流に過ぎないという定義である。それとは對照的に、日本佛教については、

殊に日本に在りては常に新しき宗旨は舊き宗旨を壓して終に純日本佛教と謂ふべき眞宗、日蓮宗の發生を見るに至れり¹⁷⁾。

との評價を下している。

また高橋は、「朝鮮人は政治萬能の民なり¹⁸⁾」と斷言し、朝鮮においては宗教が常に政治に従屬してきた歴史であったとの見解を取り、それゆえ朝鮮佛教も國家、支配者の意向に左右される存在でしかなかったのが、國家の保護がなければすぐに枯れてしまうようなものだったのだと評した¹⁹⁾。ここまで見て解るように、高橋の朝鮮佛教への見解は、獨自性の缺如(中國佛教の直輸入したものに過ぎない)と、その政治への從屬・依存を強調するものであった。

15) 同上, 11頁。

16) 同上, 24頁。

17) 同上, 14頁。

18) 同上1, 2頁。

19) 同上。

この、ように、朝鮮佛教なるものはない、と斷言するような学者が、後に《李朝佛教》という大著を著すというのは、皮肉なことではなく、植民地主義的な「知」のあり方、帝國主義と結託した「知」のあり方を物語っているように思われる。つまり、支配地域の文化を徹底的に知り盡くし、分類しようとする欲望²⁰⁾。そして「朝鮮文化の存在」や「朝鮮文化の獨自性」そのものの否定は、その上に位置するとされた日本文化への同化を肯定し、促進するイデオロギーであっただろう。彼の朝鮮文化の否定は、植民地帝國日本の「欲望」と軌を一にするものであったのである。

高橋は續けて、朝鮮人の氣質を「各論」として以下のような項目にまとめている²¹⁾。1 思想の固著、2 思想の從屬、3 形式主義、4 党派心、5 文弱、6 審美觀念の缺乏、7 公私混同、8 寛雍、鷹揚、9 從順、10 樂天的。いわゆる「民族（國民）性」論の典型例と言っても良いであろう。高橋自身はこの中でも1と2を重視している²²⁾。というのも、この特性があるから、朝鮮の哲学や宗教は獨自性がないとされるのだから。なお、8、9、10の特徴も注意すべきであろう。高橋が朝鮮人の美德と評價するこれらの特徴は、言葉を換えれば、日本の支配を抵抗なく受容する朝鮮人、というイメージを形成する性質のものだからである。では、この「各論」から高橋の「眼差し」を拾っていくことにする。

まず第一に擧げた「思想の固著」について彼は以下のように説明する。

固著性は流動性の反對なり。朝鮮人が一度思想を受容して此を我が思想となす時は何時迄も之を把持して喜びて其の權威の下に在るを謂ふなり²³⁾。

高橋はこのような朝鮮人の氣質を本質的に規定して、そのために思想（主に儒教）、宗教（佛教や風水説）に變化と進歩が見られなかったことを主張し、その原因は地質的にも全く變化がない風土にもあるのではないか、との見解を示している²⁴⁾。

20) 《李朝佛教》において、高橋が「朝鮮ノ思想史ハ新ニ吾人日本ノ學徒に向ツテ與ヘラレタル一大研究對象ナリ」（3頁）と高らかに宣言しているのは、その典型例といえようか。これまでの植民地研究が物語っているように、「知ること」は「支配すること」と繋がっているのである。

21) 《朝鮮人》の「各論」（13-60頁）のタイトルの並びである。

22) 同上、60頁。

23) 同上、13頁。

24) 同上、18-19頁。

このような自然條件が國民性を育むという見解は、和辻哲郎の《風土》、1935、同様、そのイデ

二番目の「思想の從屬」では、

語を與へて事大主義と謂ふも可なり。朝鮮史を研究する人は朝鮮が政治的に支那に從屬せるを云ふ。され共豫は政治的從屬よりも思想的從屬を以て一層其の程度大なりとなす者なり。(中略)抑々支那と交通始まり其の文物を輸入せしより李太王の甲午年(明治二十七年)迄千五百年以上全然支那に從屬して終始せり。其の宗教、哲学、文学何れも範を支那の其に取りて終に朝鮮人の獨創に係るものなし。縦令創作的產物なりとも畢竟一般に行わるゝに及ばずして已めり²⁵⁾。

と述べ、繰り返して朝鮮の獨自性を否定している。朝鮮佛教は前述のように中國佛教の亞流に過ぎないとの見解を繰り返しているが、他の宗教に對しても、

朝鮮儒学史は即低級なる朱子学史なり。基督教も亦豫の寡聞なる未だ朝鮮教會の建立せられて西洋宣教師の説教以上に朝鮮化せる新教理を唱へんとせるものあるを知らず。恐らくは基督教と雖朝鮮に於て別種の發達を見ることなかるべし。東学教獨り稍や朝鮮獨特の新宗教たるが如しと雖、其の信仰の對象たる天主は即基督教の唯一の神を竊みたるものにして其の教理は李朝末造僧侶の説を承けて儒佛仙三教名一を標榜す。畢竟耶穌教の本尊に儒佛仙の雜色衣粧を着せたるものなり。其の教典とする東經大全を觀るも朝鮮人の特殊なる信仰の源泉より出でたる新宗教たるに値する清新なる思想を發見せず。三教合一を高唱すれ共佛教に依る事最多く、其の宗教的實質に於ては極めて陳腐にして未だ以て宗教上に於ける朝鮮人の從屬性の特種例外となすに足らず²⁶⁾。

との見解を示している。それと對照的な地位を與えられるのは、やはり日本文化であった。

日本が特異なる國體を有するが爲民族に思想上の不動中心點あり、永く外來思想に隸屬するを容さず、必ず之を日本化せざれば其の存在を許さざるに、朝鮮はその國體も支那と同じく民族的中心思想なく、水の方円の器に従ひて形を變ずる如く、彼を我に化すること能はず我彼に化して終れるなり²⁷⁾。

朝鮮と中國も共に「民族の思想的中心點」がないと言っているが、繰り返すように、このような朝鮮表象は「日本化するべき(日本化可能な)朝鮮」というイメージへと直接的に結びついていったことであろう。

オロギー性を指 摘することは容易であろうが、高橋は後に確認するように、朝鮮人の日本人への同化を提唱している人物であり、單純な風土決定論者とは言えないと思われる。

25) 同上, 20-21頁。

26) 同上, 24-25頁。

27) 同上, 25頁。

三つめの「形式主義」では儒教から發する道德が内實よりも形式を重んじ、それが朝鮮人のメンタリティに根深く浸透していることを説き、佛教、特に朝鮮禪についても、論理性を重んずるがゆえに宗教的な超越性がなく「今日日本の禪客が朝鮮に禪なしと歎ずるは實に此に在り」という判断を下している²⁸⁾。

四つ目の「党派心」については、朝鮮時代に顯著であったいわゆる「党争」をその例證としてあげ、信仰心も、結局は同様の「党派心」から生じたものであると述べている。その部分を引用してみよう。

(常民は—引用者注) 一旦何か機會ありて團結を可能ならしめば相率ゐて來り投じて其團體力に依り弱者の利益を擁護せんと欲するなり。豫は李朝末葉に於ける外來宗教の盛なる宣傳新宗教の猛烈なる弘通の第一原因を此に置かんと欲す。(中略) 而して基督教東學教共に一度朝鮮に説教せらるゝや?忽にして多數の歸依者を得て直ちに朝廷の大問題となれり。是れ決して單に李朝の下民の宗教に渴したるの致す所なりとのみ速斷すべからず。由來朝鮮人は信仰に由りて動かさるゝよりも利益に由りて動かさるゝもの衆し。(中略) 基督教に入教するは個々利益擁護の爲なりとの見解の正しきは最近に至りて西洋人の力を借りて官吏の誅求に抗し得べしと信じて以て教徒たる者の多かりしに徴しても明かなり。(中略) 曰く天道教、曰く侍天教、曰く大宗教、曰く太極教、曰く孔子教と何れも深遠なる教義なく人格高き教主あるに非ず畢竟政界の失脚者自稱愛國者が宗教を利用して以て朝鮮人の團結を致して以て何等か爲にする所あらんとせるものなり²⁹⁾。

ここには、ある意味あからさまな形で高橋のキリスト教觀、朝鮮新宗教觀が現れていると言えよう。つまり信仰といっても朝鮮においては政治的不満のはげ口として機能しているにすぎないという見解がそれである。

さて、高橋は以上のように朝鮮人の特性を、宗主國の人間にふさわしい身振りで本質主義的に語っているのだが、「文明國」「宗主國」たる日本が朝鮮を指導するべきである、と言う「使命感mission」も表明している。

形式主義非審美的、文弱、党派心、公私混淆の六特性は(五特性—引用者注)日本の統治の年積もるに従ひ漸次消散せしめらるべき約束の下に在るものなり。少くとも然らずんば日本は朝鮮人に對して扶掖指導の任を盡さずと謂はるゝも辯解の辭なからん。世間往々朝鮮人特性の暗黒面を視て漫に劣等民族となし輕蔑し賤遇して顧みざる者あり。斯かる狹陋にして同情なき心掛にては朝鮮人同化の大業は成就すべくもあらず。朝鮮に在る日本人は朝鮮人が從來惡政の結果養成せしめられたる暗

28) 同上, 30-31頁。

29) 同上, 33-35頁。

き性質をば善政と優秀民族の感化とに依りて洗除して以て日本人に同化すると同時に民族的に向上せしむるを義務と自覺せざるべからず³⁰⁾。

以上の言葉を見て判るように、高橋の朝鮮人に對する様々なネガティブな断定は、日本人により向上させられる朝鮮人、というイメージを形成しているのである。續けて高橋は

又日本人の對朝鮮人感情の眞の鼓動を聴き、日本人の必ず終に朝鮮人を同化し朝鮮人の終に日本人となるべきを信ぜんと欲す。之を日本人の利益の上より觀ても勿論朝鮮人を同化せざるべからず。之を感情の上より觀るも日本人の朝鮮人に對する爾他文明國の何者よりも人種的及民族的差別感を懐くこと少し。(中略)されば老獯巧智なる西洋人宣教師等は朝鮮人に對して溫柔憐憫之を愛すること全く無我無差別なる如しと雖是れ其の多くは職業を大切にするより割出されたる勉強なり否寧ろ假扮なり。其の中心の感情を言へば朝鮮人を以て野蠻蒙昧にして牛馬と相去る遠からざる人種と極蔑しつゝあること彼等の他人種に對する一般的感情より推して疑ふべからず³¹⁾。

と述べ、日本人は朝鮮人に對し人種的にも民族的にも差別感を抱くことが少なく、西洋人宣教師を「職業柄親切に振る舞っているだけ」と推測している。ここで高橋のracismを指摘するのは容易いが、注目すべきは、高橋の意識としては、朝鮮が歐米と日本という二つの勢力の「ミッション（文明化の「使命」）」の争いの「場（アリーナ）」の様相を呈しているということである。

高橋はなおこの小冊子の末尾において、1919年に起きた「三・一獨立運動」に關して次のような感想を記している。まずは、この獨立運動がアメリカなどを頼む「事大主義」的な運動であったことを指摘する。

民衆に宣傳するに當りて某大國の援助を暗示し又は明示するに至りては豫が本編に於て朝鮮人特性の最根本的なるものとして擧げたる思想の從屬即事大主義の顯著なる發露にして、今や朝鮮青年の或部分は昔時の朝鮮人が支那思想に從屬し支那に向て事大主義を執りたると同様に亞米利加思想に從屬し亞米利加に向て事大主義を執らんとしつゝあるなり。是れ實に朝鮮人の新羅以來の最大特性を田地として發生成長する思想問題なる以上、將來の我が朝鮮統治に對して絶大なる脅威不安を提供するものなり。而して是れ朝鮮に於て日本人の手に由り誤らざる日本人の思想を通せる教化施設が統治百年の長計たる所以なり³²⁾。

ここでも獨立運動の原因は新羅以來とまで彼が述べる「事大主義」という朝鮮人

30) 同上, 61頁。

31) 同上, 62-63頁。

32) 同上, 65-66頁。

の本質に回収されてしまうこととなる。續けて彼は、

而して昨年の騷擾の中心は實に是等半日本化鮮人、半米化鮮人に在りき。而かも爾後内地に留学する青年愈々多く米國教會に出入りする者益々其の數を加ふ。現今日本に於ける所謂思想問題は半西洋化せる日本人を中心として起りて動もすれば國家社會の秩序を紊さんとしつゝあり。半日本化せる朝鮮青年は更に半西洋化せる日本人に半化して之を受賣して以て朝鮮思想界を混亂せしむるなり³³⁾。

ここで高橋が語っているのはいわば「人種論的文明論」であろう。それぞれの文明が混じり合うことを拒否し、「日本人」の純粹性を求めようとしていることが讀み取れよう。いわゆる「アメリカかぶれ」の朝鮮人も、「半日本人」も駄目なのである。そもそも日本人も「西洋」に思想的に「浸食」されていると高橋は見ている。そのような状態から脱して、「純粹な朝鮮人」がそのまま「純粹な日本人」になることを、彼は夢想していたのであろう。このような「文化混淆性 (hybridity)」の拒絶は、以下のように「宗教」の役目も、朝鮮人をして日本人化させることにあるという提言を導き出す。

換言すれば知識が感情の支配の下に立つ施設。所謂「ハート文明」を促進する施設を立て、以て彼らの對日感情を融和せしめ感情に於ても獨立を遺棄し内鮮根本義に歸依せしめざるべからず。

感情的施設、「ハート」文明の促進とは何を謂ふか。最廣を意義に於ける教化的施設に外ならず。即宗教及教育是なり。宗教は知識の程度低き社會程其の教化的勢力著大なれば朝鮮に於ける宗教政策の價値は内地の其れよりは遙に大なり。今や朝鮮宗教的施設を擧げて之を米人、半米化朝鮮人及政治趣味の強烈なる朝鮮人に一任して顧みざるは眞に臥榻の傍他人の酣睡を容るるものなり。内地宗教家の蹶起を促して止まず³⁴⁾。

つまり、ここで述べられているのは、發達程度の低い朝鮮社會は、日本に比べて宗教による教化が非常に有効であるとの見方、そしてアメリカ人やそれに影響を受けた朝鮮人に宗教界を乗っ取られないように、日本人宗教者がもっと活動するべきであるとの主張である。しかしこの小冊子の結論部において、彼は日本文化に朝鮮人に對する影響力が果たしてあるのかどうか、と自信なさげに述べているのが注目させられる。曰く、

而して若し是の如き宗教的施設是の如き教育的施設即ち同情、博愛。等最ましき人類感情の源泉より流れ出つる所の教化を施して、尙青年等が依然として亞米利加之文化を慕ひ亞米利加人に敬服し、陸續として米人の傘下に馳せ參ずるが如くん

33) 同上, 69頁。

34) 同上, 70頁。

ば、是れ眞に日本文化の根蒂なく力なきにして是に至りては誰をか咎めん³⁵⁾。

この最後に一文に植民者としての不安が端なくも出てしまった、というのは穿ちすぎだろうか。

さて、同時期に朝鮮總督府学務局から発行された《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》も、同様の内容の小冊子である。その要點を見ていこう。

まず高橋は、當時流行していた「社會有機體論」を引き合いに出し、彼獨特の有機體論を提唱する。彼は社會を動かす「動力」として「經濟力、道徳力、宗教力、政治力及知識力の五つに分ける³⁶⁾」のである。彼はこれらの力の均衡が取れていることが社會を進歩發達させると説き、「かゝる前提の下に朝鮮の社會を觀れば、政治のみ優越なる位置を保ち其の他の經濟、道徳、及宗教等は其の下に服従する故に一度政治が腐敗すれば他の總べてが腐敗し退歩するに至つたのである³⁷⁾」との見解を示す。儒教が提供したであろう「道徳」については、

次に朝鮮の道徳を見るに、從來儒教にして是れは政治と道徳とを一體と觀るところに特色を有し修身齊家は政治を行ふ準備的修養である。(中略)今朝鮮の道徳を見るに常に政治に従屬して形式上立派なるも常に政治に抑へられ往々政治に利用されて其の固有の使命を果たし得なかつたことは史上に明かである³⁸⁾。

と朝鮮の「道徳力」について否定的な見解を示している。それと同様に宗教に關しては

次に宗教的方面を述べんに高麗朝迄は佛教非常に隆んにして僧侶は政府の役人と全く同等の位置にあつた。然るに李朝に至り、政府の壓迫を受けて、全く官權の拘束の下に屈從し其の憐むべき状態は他國に其の例を見ざる所にして宗教家の信仰の自由は勿論研究の自由さへも政治の壓迫をうけて完全なる發達を遂げなかつた³⁹⁾。

と述べ、結論として

かく朝鮮が退歩したことは社會が餘りに政治にのみ偏し餘りに政治の優越を許した結果である。故に朝鮮を改造し今一度朝鮮の社會を新にせんとするには朝鮮人の腦中より政治だけ偉いと認める誤れる思想を取り去り社會のあらゆる活動力が其れ自身力を持ち、各々自身に絶對價値を持ちて活動すべきことを自覺せしめ、政治的從屬より解放せられて以て互に均整を保つに至りて初めて改造されるべきものだ

35) 同上, 71頁。

36) 《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》, 2頁。

37) 同上。

38) 同上, 3頁。

39) 同上, 4頁。

信ずる40)。

と述べているが、この時の高橋の脳裏には、朝鮮人が日本人の「政治」の桎梏から脱出する、というような想定はなかったであろう。

さて、この小冊子では古代からの朝鮮佛教史を概括しているが、注目したいのは、高橋の「國家と佛教」の関係についての見解である。彼の見解を引用してみる。

茲に一言佛教が能く國を護るが爲め國王人民共に之を信仰するものであると云ふ思想につきて愚見を述べる。一體佛教は其の布教については全然國王に委せてある。釋迦が涅槃に入るとき「我が宗は世界の王者に一任する」と言つたから佛教が他國に入る時必ず先ず國王に許可を乞ひ、其の信仰を得て後に一般に弘まつたのである。されば新羅高句麗及高麗朝にて國王が先づ是れを信仰したのは當然で佛教は國力を増進し國家を保護すると考へたのも當然である。この點は日本に於ても同様で日本初期の佛教は護國妙法と信ぜられた然るに日本では佛教が弘布すると共に諸宗争ひ起り名僧踵を繼ぎ漸く信仰は純粹となり佛法は現世の幸福のみを祈るにあらず、宇宙に對する吾人の安心の基を立つるものだと思ふに至つた。然るに朝鮮人は其特性として一度入りし思想は何時迄も不變に固持するから新羅朝に入りし佛教の信仰は千年後に至りても變りなく其の衰へ果てたる李朝に至りても全く同様である。(中略)若し國王たるものが佛の轉輪聖王の道を守り大臣達が亦佛法の説く所の道を行へば國は期せずして安寧となり國運の隆盛に赴くことは明かであるのに朝鮮の佛教に於ては其の内面的眞理を考へず、唯表面の文字通りに考へたから、寺を建てることや、敵を退散させる祈禱などに没頭して居た、この朝鮮人の思想上の特徴として表面的、形式的なることは儒教に於ても全く同様であつて徒に表面の禮儀のみに拘泥し仁義、忠孝等内面的の研究を忽にしたのを見ても、やはり固着的であり式形的であることが解る41)。

ここで表明されていることは、朝鮮佛教の形式性や、内面性のなさである(朝鮮儒教についても、同様の評價が與えられている)。その反面、日本においては佛教各宗派の争いによって國家から離れた「純粹な」佛教が誕生したと主張している。高橋は朝鮮佛教がいわゆる「護國佛教」という考えから進んでいない(それどころか千年間もその考えに固着している)ということを強調しているが、繰り返すまでもなく、これは前述の《朝鮮人》同様の朝鮮人觀がそのまま投影された朝鮮佛教觀であるといえるだろう。

また彼は朝鮮佛教、特に朝鮮朝以降の佛教のいわば「覇氣の無さ」を訝しむ。曰く

かゝる例(世宗によって宗派を禪宗と教宗の二派に統合されたこと—引用者注)

40) 同上, 4-5頁。

41) 同上, 21-22頁。

は獨り朝鮮に於てのみ見るべき現象で、他國に於ては如何に壓迫を加ふるともかくの如き亂暴な教政はなく又斯く高壓的に機械的に宗旨を併合せしめたるに對し僧侶が何等不平を言はざりしも實に奇怪の現象である⁴²⁾。

これも言葉を換えて、國家と離れられない朝鮮佛教像を描いたものであろう。この小冊子の末尾にも

されば朝鮮の佛教は其の盛衰を國王に委ねて居り、國王若し佛を以て國運に關係なしとして保護しない時は忽ち衰へるのである。今日猶寺院の存せるも現在の福利を祈る爲めの佛教であつて勿論純粹の佛教ではない⁴³⁾。

と、あくまで朝鮮佛教は「純粹の信仰ではない」という立場を表明している。そのような高橋であれば、以下のような結論は當然であろう。これも前年に起きた三一獨立運動と、それへの宗教者の関わりを念頭に置いた箇所である。

故に今後もし朝鮮の佛教を再び盛んならしめるには眞の信仰を與へ、宇宙的安心を與ふる種子を蒔く必要がある。然らざれば全く復興の望みないのである。他の宗教即天道教、侍天教、敬天教、太乙教、吩叫教（これは呼教、つまり甌山教のこと—引用者注）などに於ても全く純粹の信仰を根本と立てず畢竟佛教と同じく政治的利益に關係あることを歴史的に知ることが出来る。昨年以來基督教及天道教が政治問題と如何なる關係があつたかを見ても其の一般を知ることが出来るし又其の布教状態を見るも教理教義の説教を以て布教方法とせず將來朝鮮は自分たちの奉ずる宗教のものとなり、我が信徒は其の時に至り、必ず立身出世せしむべしと言ひ、或は何年後に於ては必ず其の希望を達すべしなどいふに就きて觀ても其の信徒は純粹の宗教的信仰をもするものに非ざることが解る⁴⁴⁾。

ここで説かれているのは、宗教は政治から離れるべきものである、という高橋自身の考えである。一種の政教分離觀とも言えようが、先に見たように、三一獨立運動は、高橋にとっては「半日本化鮮人」「半米化鮮人」や純粹な信仰心を持っていない者が起こした「騷擾」なのである。確かに當時の朝鮮新宗教には、現世利益として、將來の高い地位などを約束した教團が存在したが⁴⁵⁾、高橋にとっては朝鮮の

42) 同上, 31頁。

43) 同上, 36頁。

44) 同上。

45) 例えば普天教などは、信者達に時期が來れば（つまり「千年王國的」な世界がやってくれば）布施の多寡に應じた地位が約束されるという教えを説いていたことが伺える。このことは趙景達《朝鮮民衆運動の展開》岩波書店、2002、第9章「救世主の誕生」を参照。

宗教（佛教も含めて）は、國家、即ち政治（的價値觀）から離れられない存在として本質的に規定されているのである。結論として高橋は、《朝鮮人》と同様に、日本の宗教家の奮起を期待してこの小冊子を終えている。それに曰く

故に純眞なる佛教が興るには何宗派たるを問はず、政治的利害の觀念より解放され純一なる信仰の上に立ち布教しなければならぬ。随つて朝鮮に於ける宗教政策も色々の困難を伴ふわけであるが要するに朝鮮人を濟度するは日本の宗教家の大なる困難を覺悟したる一大奮起に俟たねばならぬ⁴⁶⁾。

ここから読み取れるのは、「濟度」する日本の想定である。この一語に、「文明化の使命」が読み取れるだろう。しかも宗教は政治から離れて「純化」しなければならないのである。これは高橋が當時持っていた朝鮮宗教觀からすれば當然と言える結論ではあろう。

IV. 高橋亨の朝鮮佛教觀： 《李朝佛教》を中心に

年譜に據れば高橋亨は、韓國併合當初から古書、金石文の収集を總督府に進め、それに従事したとあるが、朝鮮佛教の研究そのもののきっかけは、年譜によると、高橋は1912（大正元）年夏に「史庫調査のため江原道江陵五臺山月精寺に赴き靈鑑庵に起臥すること半月、資料の格別珍しきものなかりしが、月精寺及其の禪房なる上院寺僧侶の勤行正しきを見、僧侶への認識を一變して朝鮮佛教の研究に志向す⁴⁷⁾」とあるが、朝鮮佛教については、尊敬の念を抱いていたとは到底思えない⁴⁸⁾。

《朝鮮人》《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》の九年後に著された彼の千頁を超える大著《李朝佛教》は、大半が収集した資料の紹介・整理であり、それを要約することは到底筆者の手に餘るが、ここではその佛教觀の傾向を大掴みに見てみよう。

まず、「序」において、彼は次のように述べる。相變わらずの「朝鮮佛教觀」である。

佛教々理上ヨリ觀レバ朝鮮佛教ハ特ニ獨創的資料ヲ提供スルモノニ非ラズ。殊ニ

46) 《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》, 36頁。

47) 朝鮮學會《朝鮮學報》十四輯、1959、5頁。

48) 《李朝佛教》でも、《朝鮮人》の記述と同じく、「朝鮮佛教史ハ即小規模ナル支那佛教史ナリ。其他朝鮮ニ於テ起レル諸種ノ宗教モ亦實ハ支那思想ノ少シク扮裝ヲ改メタル者ナリ」（「本文」13頁）とあることからそれは伺える。

李朝佛教ニ於テ尤其ノ然ルヲ見ル49)。

ここでも、朝鮮佛教の獨自性を否定し、殊に李朝においては教理上に見るべきものがないと断定している。續けて彼は、ならばなぜこの研究をするのかという問に先んじて答えている。

朝鮮佛教ハ其全體、教理發達史トシテハ内容空疎ナルヲ免レズト雖、翻リテ之ヲ具體的宗教史トシテ觀ルトキハ他ニ比類ナキ特質ヲ有ス。即宗教トシテ本來具有スル所ノ教化機能ノ盛衰隆替ノ歴史ニ於テ一種特別ナル事實ヲ有スルモノナリ。詳言スレバ新羅高麗兩朝約八百年ハ佛教完全ニ國教トシテ國民ノ思想及信仰ヲ統御シ。李朝ニ入りテ約五百年全ク國家ヨリ教化ノ權ヲ奪ハレ以テ宗教本具ノ機能ヲ失墜スルニ至レリ。而シテ其ノ教化權ノ與奪ハ一ニ朝廷教政ノ方針施設ニ係依シ、幾百萬ノ信徒幾萬ノ僧侶ハ唯々焉トシテ惟命之ニ從ヘリ。何故ニ李朝々廷ハ佛教ノ教化權ヲ奪ヘルカ。而シテ何故ニ僧徒ハ之ニ反抗セザリシカ。其ノ經過ハ如何ナリシカ。是レ李朝佛教ガ其ノ研究者ニ向ツテ與フル他邦ニ比類ナキ佛教知識ナラズンバアラス。斯クテ李朝佛教ハ朝鮮佛教史中一種獨特ノ地位ヲ占メ其ノ研究ハ吾人ニママ鮮新ナル學的興味ヲ提供ス50)。

とその意義を一應は述べている。しかし、なにやら取って付けたかのような感じがするのは筆者だけだろうか（事實、これらの疑問に高橋は思想面からの直接回答を與えてはいない。例えば白坡大師という僧の「三禪論」を批判する際、「朝鮮学人ノ通有性タル形式論理ニ拘泥シテ51)」などといった相變わらずの本質主義的な朝鮮人論を持ち出すのみである）。

さてこの書で注目されるのは、韓國併合後の朝鮮佛教に關する彼の觀察と、日本佛教との比較の視點である。高橋は、日本と朝鮮兩國の佛教に關して、どちらにも長短があるというある意味で穩當な意見を持っていた。彼が最も強調するのは、戒律を守る朝鮮僧と、無戒律の日本僧という對比である。朝鮮佛教の思想性についてはにべもない彼が、戒律を守る朝鮮僧侶を賞賛し、日本から流入した「妻帶僧」制度に對しての落膽を隱さないなどはその一例である。例えば、

今ヤ其ノ解禁（1925年に行われた寺法から比丘戒律の削除。即ち妻帶の解禁—引用者注）ヲ見ルニ至リ、將來殆ド全部ノ朝鮮僧侶ハ制欲ノ苦痛ヨリ解放セラルルト同時ニ、持戒ノ與フル聖ナル者ノ自覺ヲ喪失スルニ至ラン52)。

49) 同上、「序」1頁。

50) 同上、2-3頁。

51) 同上、「本文」、845頁。

52) 同上、954頁。

と、妻帯僧に對して苦々しく思っていることが伺える。同様に

而シテ今ヤ朝鮮叢林モ日本僧侶ノ迹ヲ追ウテ比丘戒ヲ持セザル者ノ大本山住持タルヲ認許スルニ至レリ。是ニ至リテ比丘戒モ朝鮮僧界二名ノミ殘ル⁵³⁾。

とか、

日本僧侶ニ倣ヒテ食肉・飲酒・蓄妻ノ可ヲ論ズル者アルニ至レルハ是レ其ノ三弊(植民地期に、朝鮮佛教が「社會性」を回復したために却って發生した弊害を高橋は數え上げているー引用者注)ナリ⁵⁴⁾。

と、日本佛教の「惡しき影響」について述べている。また、朝鮮には檀家制度がないので、世俗のことに關わる度合いが日本僧侶に比べて低いことも彼には好もしくは見えていたようである⁵⁵⁾。

高橋のとりあえずの結論は、

新羅・高麗及李朝國初一千餘年間佛教國タリ、現ニ尙其ノ種子ノ充分ニ遺レル朝鮮ニ、何故ニ言語、風俗、習慣、及信心ノ様式ヲ殊ニセル日本人僧侶ノ手ヲ假リテ始メテ此ヲ復活スルヲ要スベキ。日本人僧侶ハ宜シク朝鮮佛教ト並行シテ我が宗旨ヲ朝鮮人間ニ布教スベキ者ナリ。但シ朝鮮佛法ハ四百餘年間社會圈外ニ迫逐セラレシ結果、僧徒ノ教養布教等ニ於テ日本僧侶ヨリ学ブベキ所甚ダ多シ。朝鮮佛教徒ハ日本佛教徒ニ教ヲ乞フノ謙讓ト寛量トアルベキナリ。是ヲ過・現・未ニ亘レル朝鮮佛教ノ總結論トナス⁵⁶⁾。

というものであったが、ここにも日本佛教に對しての信頼感はあまり見られないであろう。大まかに言えば、高橋は、朝鮮佛教については持戒に關しては評價し、日本佛教に對しては教学的な面において評價はしているが、兩者を合體させるような發想はなかったようである。ただし朝鮮佛教側が日本佛教に学ぶことは奨勵されている。

しかし後に高橋は、日本佛教・朝鮮佛教ともに民衆の指導的役割は果たせないと思ひ至るようになった。朝鮮總督府は、1935年頃から「心田開發運動⁵⁷⁾」と呼ばれ

53) 同上, 1018頁。

54) 同上, 1042頁。

55) 同上, 1028-1029頁。

56) 同上, 889頁。

57) 心田開發運動は、宇垣一成總督(任1931-36)の施政下で行われた。この政策については、拙稿「植民地期朝鮮における「心田開發運動」政策」、《韓國朝鮮の文化と社會》第一號、風響社、2002、參照。

るイデオロギー政策を行ったが、その際に高橋は、朝鮮佛教が以前から主張していたように「歴史的に離るゝ能はざりし依他性」を有すると斷じ、以下のように佛教そのものの感化力に疑問を呈している。

是の如き佛教を以て朝鮮民衆の心田を開發せしむる教法となさんとするは木に縁りて魚を求むるよりも無理である。例へば自分に巨額の借金を有する者が他人の貧乏を救濟せんとするに似たりとも謂ふべきである。故に今の情勢にありて朝鮮佛教としては其よりも先づ第一に自己の更生を謀らなければならない。(中略)最後に私は朝鮮僧侶の日本内地の宗教学校に留学するを以て朝鮮佛教の更生振興に向つては一利もなしとなすものである。何となれば日本の佛教学會は唯だ佛教々々の知識にのみ馳せて前述宗教家としての修行と情操とに全然缺如するからである⁵⁸⁾。

これが「植民者」としての高橋の結論であった。結局彼の朝鮮佛教に對する「眼差し」にはほとんど「ぶれ」がなかったことが伺えよう。

V. まとめにかえて

以上見てきたように、高橋の説は、植民地の過去のイメージ(具體的には、「獨自文化を持たない朝鮮」というイメージ)に、いかに驚くほど現在の支配の欲望が投影されているか、という一つの典型的な「症例」であると言えよう。これもまた、一つの「創られた傳統(invention of tradition)」⁵⁹⁾と言えらる。しかし戦前、戦後を通じて日本の「朝鮮学」の中心をなした人物の一人であった高橋亨のある意味の「凡庸さ」が、未だに我々の目の前に「横たわっている」のである。

さて私は本稿で「凡庸さ(平凡さ)」ということの一つのキーワードに設定した。今まで検討してきた高橋のこのパンフレットは、その当時の偏見にまみれていて、いわゆる「植民者」意識丸出しで、つまりはあまりに「平凡」で、現在取り上げるに殆ど値しないテキストなのは一目瞭然であろう。しかし私は却ってそのようなテキストだからこそ取り上げたのである。普通、思想史では、その当時のいわば例外的に「通有性のある」テキストを取り上げ(この時代ならば例外的に朝鮮人に同情した柳宗悦⁶⁰⁾のテキストなど)、その「可能性」もしくはその「限界性」を検證

58) 高橋亨「朝鮮佛教の歴史的依他性」、朝鮮總督府《朝鮮》1936. 3、15-18頁。

59) エリック・ホブズボウムEric Hobsbawmらが提唱した、この有名な概念は、近代の様々な學知(特にnationに關わる學知)が形成される過程を分析する時の有効な道具となるであろう。エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編(前川啓治他譯)《創られた傳統》紀伊國屋書店、1992、參照。

するというのが思想史としての生産的な營爲だと思われるが、本稿では、ある意味そのような「可能性」がほとんどない、「マジョリティ」のテキストであったであろう《朝鮮人》《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》《李朝佛教》を敢えて俎上に取り上げ、その性格を再検討しようとした。

本質主義的な民族論（例えば「日本人は集團主義的」だとか「朝鮮人は朱子学の影響で理屈っぽい」だとか）が、その時代の要請でどのようにでも變化する、つまり同じ特質もある時代ではプラスに評價され、ある時代ではマイナスに評價されたりするということは、今までいわゆる「日本人論」を、イデオロギーとして批判してきたあまたの研究が明らかにしてきたことである⁶¹⁾。であれば次に我々がなすべき事は、そのようなテキストのイデオロギー性を暴くことと同時に、それがどのように「受容」されたり「消費」されたかを検討する、一種の知識社會学的な視座からのアプローチではなかろうか。

私は高橋のような誤解のしようもないほどの差別的な言説が、イデオロギーとして日本人、朝鮮人雙方に影響を與え、互いに自畫像、他者像を描く「アリーナ（場）」において活用されたのではないか、と思う⁶²⁾。いま我々が問い返すべきなのは、そのような「作用」についてであろう。

例えば、朝鮮近代文学の父ともいわれる李光洙などは、おそらく高橋を始めとする日本人側の朝鮮人論を読み、それに反發するなり反應を示し、自畫像（朝鮮人像）、もしくは日本人像を形成していったと思う。李光洙は後に創氏改名して最大の「親日作家」の一人となるわけだが、彼は「民族改造論」⁶³⁾なるものも書いている。これは支配側から押しつけられた「朝鮮人像」をある程度受容した後の仕事だと理解されよう。朝鮮における民俗学の鼻祖と目されている崔南善は、朝鮮佛教について、その優れた特性として超歴史的に「會通的」である、という主張をしたが（「朝鮮佛教—東方文化思想におけるその地位」1930年）、これは高橋のような朝鮮佛教に對する否定的規定と對稱性をなしていると思われる。これは植民地支配者の否定的規定と、被支配者の自己肯定的な對抗的言説の戦いと見なして良いだろう

60) 柳宗悦についての最近の傳記として中見眞理《柳宗悦—時代と思想》東京大學出版會、2003、がある（特に第六章「東洋のなかの「日本と朝鮮」の位置」、参照）。

61) 典型的には南博《日本人論》岩波書店、1994年、ハルミ・ベフ、《イデオロギーとしての日本文化論、（第三版）》思想の科學社、1997、青木保《「日本文化論」の變容》中央公論社、1990年、小熊英二《單一民族神話の起源》新曜社、1995、同《〈日本人〉の境界》新曜社、1998 等を参照。

62) 南富鎮《近代日本と朝鮮人像の形成》勉誠出版、2002年、参照。南はこの書において、植民地期の朝鮮人の自畫像が日本人の朝鮮人像から影響を受けて形成されたことを指摘している。文學における朝鮮表象の問題を取り扱った最近の研究に中根隆行《〈朝鮮〉表象の文化史—近代日本と他者をめぐる知の植民地化》新曜社、2004、が存在する。

63) 《開闢》1922, 4。この論文のおよその内容は南富鎮前掲書119-128頁、参照。

う64)。この両者はまさに合わせ鏡の関係にある。

繰り返しになるが、高橋のような言説の「機能」や「果たした役割」は、日本人にとっては支配すべき朝鮮人というイメージを定着させたこと、朝鮮人にとっては肯定するなり反発するなり、自画像の形成にある意味「寄與」したことであろう。

植民地に關わる「学問」のそのような落とし穴、すなわち学問自體の権力性は最近の研究でも廣く言及されているが65)、高橋の他の学者や宗教家の言説に迫ることは至れなかった。今後の課題としたい。

《 参考文献 》

- 村上智順 外一共著，《朝鮮巫俗の研究》，大阪屋號書店出版，1937。
 旗田巍，〈滿鮮史の虚像〉，《日本人の朝鮮觀》勁草書房，1969。
 半井清，朝鮮總督府，《朝鮮の統治と基督教》，1921。（龍溪書舎より1995年復刻）
 小田省吾，朝鮮總督府学務局，《騷擾と学校》，1921。
 -----，《朝鮮の統治と基督教》，1921。
 -----，《朝鮮人》，1920。
 -----，《朝鮮宗教史に現はれたる信仰の特色》，1920。
 -----，大阪屋號書店，朝鮮總督府宗教課の渡辺彰，《天道教と侍天教》，1919。
 旗田巍，〈滿鮮史の虚像〉，《日本人の朝鮮觀》勁草書房，1969。
 趙景達，《朝鮮民衆運動の展開》，岩波書店，2002。
 宇垣一成總督，《韓國朝鮮の文化と社會》第一號，風響社，2002。
 エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編，前川啓治他譯，《創られた傳統》，
 紀伊國屋書店，1992。
 柳宗悅，《柳宗悅—時代と思想》，東京大学出版會，2003。
 ハルミ・ベフ，《イデオロギーとしての日本文化論（第三版）》，思想の科学社，1997。
 青木保，《日本文化論 の變容》，中央公論社，1990。
 小熊英二，《日本人 の境界》，新曜社，1998。
 -----，《單一民族神話の起源》，新曜社，1995。
 南富鎮，《近代日本と朝鮮人像の形成》，勉誠出版，2002。
 小倉紀藏，〈佛教〉，古田博司・小倉紀藏編，《朝鮮學のすべて》，新書館，2002。
 村井紀，《南島イデオロギーの發生》，太田出版，1995。
 川村湊，《大東亞民俗学 の虚實》，講談社メチエ，1996。
 朝鮮總督府中樞院，《舊慣制度調査事業概要》，1938。

64) 小倉紀藏「佛教」、古田博司・小倉紀藏編《朝鮮學のすべて》新書館、2002、191頁。

65) 例えば植民地主義と民俗學に關しては、村井紀《南島イデオロギーの發生》太田出版、1995年や、川村湊《「大東亞民俗學」の虚實》講談社メチエ、1996年等を参照。

朝鮮總督府学務局, 《日本社會学院年報》, 4-3,4-4,4-5, 1917.

朝鮮學會, 《朝鮮学報》, 1959.

高橋亨, 朝鮮學會《朝鮮学報》, 十四輯, 第四十八輯, 1959.

-----, 〈朝鮮佛教の歴史的依他性〉, 朝鮮總督府《朝鮮》1936